

季節外れの暑さと肌寒さが交互に続いたためか、風邪を引き込み、歯が疼き出した。歯の方は先日、硬い荒尾梨を剥き、いつもの調子で、丸ごと食おうとしたときにバリッと嫌な音をたて、前歯が欠けたのだった。しかし、今の疼きは、前歯ではなく奥歯の方だ。

歯への心配が心のどこかに芽生えていて、この移りやすい気候の中で、神経にでも来たのだろうか。

僕は、近くの歯医者を探そうとウェブを検索しているうち、マウスの先が勝手に、あるサイトを選択したのだった。「二億五千万年後の地球の予想図」といったタイトルのそれは、寸時に動画を流し始めた。四十七分を超えろという表記に、すぐに「停止」しようと思っただが、動画の中心にはそれをさせない何かがあった。

五億年のサイクルで大陸は移動しており、二億五千万年で一つに集積し、残りの二億五千万年で離れるのだという。ちなみに現在のは後期に当たり、かつてパンゲア大陸という一つだった超大陸が分離移動し、今はほどよい距離に大陸が散らばったため、気候も温暖で、水も大気の組成も安定しており、多くの生命が生息出来るのだという。

では、これからの二億五千万年後はどうなのか。マントルの上に浮いた大陸は、一年に一センチに満たない動きでありながら、確実にプレートは移動し、北米大陸は西欧方面へ、アフリカ大陸は南米方面へ、南極大陸はアジア方面へ向けて動き、衝突や沈み込みなどを繰り返しながら、終には次なるパンゲア大陸である、一つの超大陸となってしまうのだという。

こうやって、陸が一、海が一という配置に偏ってしまう過程や結果において、プレートの移動や衝突により地震を頻発させ、マグマの活動が活発になることにより火山を噴火させる。それらのことで大気の変化や、海水温の上昇を招き、気候を変動させ、風速百五十メートル以上の巨大ハリケーンを出現させたりするという。

また、平均五十度以上という気温の上昇からくる、局地的豪雨と激しい乾燥が交互に見舞い、広大な砂漠と化した死の大陸を形作るのだという。挙げ句には、大気には毒ガスである硫化水素の比率が増し、酸素は生物が存在でき得る臨界点を下回ってしまい、その後は、幾多の変遷を経て、地表温度が五百度にもなれば、熱く乾いた星になってしまうだろう、という予想図であった。

この間には、太陽の高温化という現象も表れるようであるが、要するに、今唯一の水の星といわれる地球も、そう遠くはない時期に死の星になってしまうのだ、というサイ

エンズストーリーである。

僕は、歯の痛みに耐え、じりじりしながら時計を覗き込み、いい加減に腰を引こうと試みてみたが、最後の編集作成者の帯が流れるところまで見尽してしまった。

これらの話が荒唐無稽だと思わない僕自身に問題があるのだとは考えつつも、妙に感動しながら、最後の、大地に砂塵が吹き荒れる場面に釘付けになり、発生から半年以上が経過したまま一向に片付かない東日本大震災のことを思い、十六年が過ぎた阪神大震災のことを思い、先日の内閣改造のことを思い、文学賞を受賞したという作家の記事のことを思い、田舎の老いた親のことを思ったりした。

迂闊なことに、すぐに思い浮かばなかったのだが、今のほどよい分離状態にある大陸に至る直前の旧パンゲア大陸の時代は、死の星であったのだろうか。そうであったとしたら、二億五千万年をかけて、今の水の星になったのはどういう道筋の故であろうか、という疑問が頭をもたげかけてきたのであるが、少々面倒臭くなった。とはいえ、「二億五千万年もの後のことなど知ったことではない」と開き直ってしまうには、何とも尻が落ち着かない。

不思議な話である。第一期か第何期かは知らないが、先のパンゲア大陸においても、陸が一、海が一であるということとで異常気象を招き、地表温度が五百度という死の大地になり、死の星になっていたというのなら、今後の二億五

千万年後のさらに二億五千万年後、つまり五億年後には今の水の星に戻るといふ理屈になってしまうのではないか。「ケチな虚仮威しだ」と嘯いてはみたものの、科学にまるで疎い僕には、余計尻のあたりがムズ痒くなる。

そうでなくても世界中で大地震が頻発し、ハリケーンや竜巻が猛威を振るい、洪水が襲い、火山もあちこちで噴出してている。テロや暴動も増すことはあれ、減る気配はない。それにもかかわらず、ヒトは利権に群がり、美酒美食に酔い、陰謀の限りを尽くし、他を蹴落とすことに余念がない。原発事故が今の段階で留まったとしても、僕たちの時代には収束には至らない。放射能の半減期がどうかとは聞いても、それも気が遠くなりそうな数字でしかない。

水の星：ひよつとしたら、水の星である地球は、それを後悔しているのかもしれないな、とふいに思えてきた。「小賢しい厄介な生物たちを胎内に宿したばかりに、難儀極まりない」そう言っているのかも知れない、と考えた。

ウェブの方は、「戻る」ボタンをワンクリックすると、歯科医院の検索ページを表示したので、「良い歯科ロコミ情報」というサイトを開き、一瞥した。しかし、すぐにも出かけようと思っていたほどの痛みは、いつか隣の壁板にでも吸い込まれてしまったかのごとくに薄れていた。